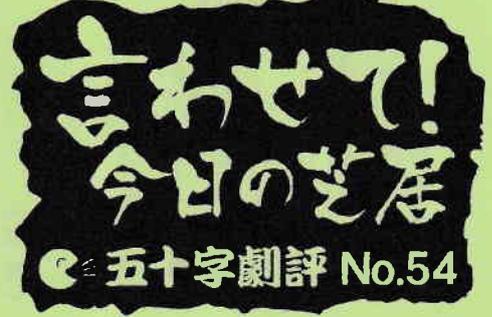


# 舟船 猫と目鎌腹

茂山千五郎家  
狂言



## 【二〇代】

▼五〇字では書き切れない程、面白い所が沢山ありました。狂言の手法として何度も繰り返す笑いというのが、今というコントのような雰囲気があり、新鮮でした。芝居とは客側に由来するという話が印象的でした。狂言を通して改めて対話の

物語である演劇は素敵だと思いました。(女性)

## 【六〇代】

▼最初中々気持ちが入ってなくむずかしかったのですが、三本とも中々観ごたえがありました。(女性)

▼古い言葉遣いなので解らない所もありましたが、はじめの解説があつて狂言の内容に近づくことができました。金の屏風だけの舞台であらゆる景色や場面をイメージさせる動作や台詞回しは素晴らしいと感じました。(女性)

▼最初のお話が、楽しく聞けて、三本の狂言にすくと入って行けたと思います。何か良いものを観た気がしました。(女性)

▼まずは、声量のすごさに感心!!そして所作の綺麗な動きにも感心!!最後に大笑

いもして、気持ちよく帰宅。

(女性)

▼発声、声がすごい、その上声の表現力がすごいと思いました。(男性)

▼松本薫さんによる解説の中で、「芝居」の由来の部分が面白く「なるほど!」と思った。『舟船』の主人公と太郎冠者のやり取りが面白く、三作品の中では最も狂言らしさを感じた。『猫と月』の作者はアイルランド人で、もともと狂言として作られたものではないとのこと。それを狂言風に仕立てているところが面白い。「神の祝福」の意味など分からないところもあったが、最も演劇的な内容だったと思う。『鎌腹』は、怠け者の夫と働きの者の女房の大喧嘩の場面は面白かったが、女房のいやらしさだけが浮き上がって見えあまり魅力を感じな

かった。(男性)

▼新作は、仲間も皆解からなかったと言っていました。が、三作目は声を出して笑ってしまいました。楽しかったです。(女性)

▼コロナの次はウクライナ、統一教会と政治、行き場のない怒りを抱え過ごす毎日を、ちよつと笑わせてくれて、肩の力がぬける…?楽しい気持ちで帰りました。(女性)



(女性)



▼約束ごとの上、想像する芸能。『舟船』は言葉遊びのよう。『猫と月』は、キリスト教の聖者の存在にハテ？『鎌腹』で、強い女房と、潔くない夫のコント風な内容で納得。  
(女性)

【七〇代】

▼伝統芸能は本当に久しぶりでしたが丁寧な解説があつて楽しく観ることができました。猫と月はもう少し解説がほしかったです。  
(女性)

▼久しぶりの狂言を楽しみにしていましたが、途中でねむくなったり、理解できないまま終わっていました。  
(女性)

▼猫と月の演目で、二点わからないとところがあつた。私が聞き逃したのかも知れないが、一)猫はどこに出て来たのでしょうか？二)聖者が望みは何かと言うと、目の見えない人は目が見えるように、足の悪い人は祝福を受けることでしたが、見えるようになって去って行き、祝福を受け踊っていました。そのあと足はそのまま、祝福とは今一つわからない。宗教的なものは想像しがたい。演目の鎌腹は鎌で色々死のうとするが観ていて少しハラハラしながらも自然に笑いがこみ上げてきた。  
(女性)

▼観てすぐ笑えた舟船や鎌

腹に座布団を一枚多く！猫と月、西洋の詩人たちは狂言への挑戦これからもどうぞ！  
(女性)

▼特に、三話目の夫婦関係を単純に様式化された繰り返しの面白さの重なりが最後の落ちへと結び、ある種痛快さを覚えました。  
(男性)

▼始めの狂言についての話のお陰で舞台に向かう気持ちが高まり、最後の演目には時間を忘れ楽しめました。  
(女性)

【年代不明】

▼狂言は話はシンプルだけど面白い！一人一人の狂言師の表現力、台詞回しは迫力がありました。

▼古典二作は、安定した出来であり、特に鎌腹は役者が気の弱い男を好演しており、狂言独特の面白味が出

ていた。一方、新作はセリフが聞きづらく楽しめなかった。

▼「芝居」の説明に納得。緩やかで凜とした狂言の動きは、四三年前に観た山本安英の「夕鶴」を想い出しました。

編集スタッフから

今日の芝居を含めて、今年の投稿もあと二回となりました。一年がとても早く感じます。チコちゃんに言わせると感動が少ないからとか。益々芝居のありがたみを思います。なかなか遠くに自由にいけない。旭川に居ながらにして、様々なお芝居が楽しめます。厳しい時代ですが、旭川で観続けるために、コツコツと声かけしていきましょう。